

令和6年度 府中町立府中中央小学校 学校自己評価表【最終評価】

学校教育目標	自ら伸びる 「問い直し」を大切に、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション ビジョン	「学校は子どもが育つ土壌である」 （自ら伸びる意思の形成をなす土壌） 【使命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の業務の充実と研鑽に励む
--------	---	-----------------------	---

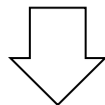
ビジョン (中期経営目標) 実現に向けての現状(進捗状況)と今年度の位置付け	<p>本校は、この3年間、「自ら伸びる」を学校の方向目標とし、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく教育活動を創造してきた。20年以上継続している「じまんの俳句」に加えて、特に令和4年度後半の配慮を要する児童の姿から「事案が生じた後の対応だけでは足りない。児童自らがより良い暮らしを創っていく主体者となることの方が大切ではないか。」との当時の教師たちの課題意識から、様々な目標が児童や教師にとって軸をもって追求しようと「はちの子の心得」の取組を中核として、暮らしの有りようを問い直しながら、「生きた言葉」を生み出す活動を積み上げてきた。</p> <p>さらに、令和5年度は、児童自身が山を創り、他者と協働しながら「群れ」から「集団」へ成熟していく過程を大切に授業や行事を創造してきた。特に最高学年の児童に対しては、全教職員が縦割り活動等での良いふるまいを価値付けるよう意識したり、地域行事へ参画させたりと、自己有用感を得る機会を生み出すことに力を入れた。その中で、最高学年である6年生自身が本校のめざすべきリーダー像を創っていくに至った。</p> <p>そうした中、教師は「はちの子の心得」が学校教育目標「自ら伸びる」を追求していく基軸となっていることを実感しながらも、全学年がそれぞれの発達段階に応じて「児童自らがより良い暮らしを創っていく主体者となっているか」を問い直した時、次のことに課題が見えてきた。すなわち、日々の暮らしの中に起こる様々な学級の問題に、児童一人一人が自分事として関わり、自分たちの問題として捉え、自分たちで解決の道筋を見出し、自分たちでよりよい暮らしを創っていくという学級づくり・学年づくりである。この課題の問い直しを通して、分掌主任等が中心となり、「本校は子どもをどのような存在として見るのか」と熟考し、「子どもは発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払うべき存在である」という本校の子ども観を明確にした。</p> <p>そこで、これからの3年間は、これまで培ってきた「最高学年としてのリーダー像を6年生が創り出す」という方向性のもと、「じまんの俳句」「はちの子の心得」を中核とした教育活動を通してそこに現れてくる「子どもの姿」に、自分たちの「子ども観」を照らし合わせ、一人一人の子どもに発達の可能性を見出しながら、学級・学年・学校での関わり合いの中で、自ら根っこを太らせていく教育を追求していく。</p>
---	---

学校経営の柱に係る考え方

a 「生きた言葉」が生まれる学級・学年経営(学級・学年経営力)	学級・学年づくりが「自ら伸びる意思」の形成につながるには、「その子が出来事を通して仲間とどのように出会い、どのような関わろうとしているか」、「その子は、本当はどのように育ちたがっているか(児童のねがい)」という教師の目の向け方が大切である。この教師の向け方が、児童に「自分たち一人一人がより良い暮らしを創っていく主体者である」ことを意識付け、児童自身が学級の山場を創っていくと考える。そこで、中核の取組である「じまんの俳句」や「はちの子の心得」を中心に児童一人一人から紡ぎ出される「生きた言葉」を手掛かりに「その子が出来事を通して仲間とどのように出会い、どのように関わろうとしているか」「その子は、本当はどのように育ちたがっているのか」を問い直し、学級が学習集団として成熟していく学級づくりの在り方を追求する。
b 「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり(教師の授業力)	学びの創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、「自分たちで自分たちの学びを生み出そうとしている」姿や「自ら考え出そうとしている」姿に「発達の可能性」を見出していく教師の目が大切である。そこで、教師が「教えること」を児童に少しづつ委ね、児童の可能性を見出すことで、児童一人一人が、仲間とともに「問い直しのサイクル」を回し、自己選択・自己決定しながら学ぶ楽しさを得ていく授業づくりを追求する。
c 自己認識を問い直す行事づくり(児童自治)	行事の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、日々の係(委員会)活動や各種行事の中で、失敗したり、自分の思う通りにできなかったりと、自分を問い直さざるを得ない状況でこそ「自らの殻をやぶり、自らを成長させたい」との切実な願いが醸成されていく、この過程をいかに経験するかが大切であると考える。教師には、「今この児童がどう取り組み、どこにこの児童の主体を確立していく可能性があるか」と児童一人一人が経験しようとしている中に、一人一人のもつ良さや「発達の可能性」を見出していく教師の目が切実に問い直される。そこで、各種活動や行事を通して、児童が「自らの殻をやぶり、自らを成長させたい」との願いの醸成に、教師の目が働いているかを問い直し、本校のリーダー像を6年生が創り出す姿を下学年が手本としつつ、前学年から引き継がれた可能性を、現学年が受け取り、伸ばしていく行事づくりを追求する。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり(地域との協働)	環境の創造が「自ら伸びる意思」の形成につながるには、児童を取り巻く大人たちが、互いにつながりながら共に成長していく土壌を創り出すことが大切である。そのためには、PTA活動を子どもの育ちを中心とした「保護者と教師の学習機会」として再構築しながら、保護者は「わが子」を「わが子たち」の関わりの中で見ていけるように、教師も「この子」を「この子たち」の関わりの中で見ていくよう、共に問い直しをしていく。また、学校にとって「地域の皆さんがいてくれてよかった」と思える活動に留まるのではなく、地域の皆さんにとって「府中中央小があってよかった」と思ってもらえる場・機会の有りようを追求する。

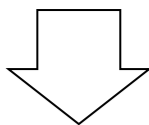
評価計画(中期経営目標を設定して3年目)

A 中期(3年間)経営目標	B 短期(今年度)経営目標	C 目標達成のための方策	主な成熟度		現状	D 評価指標	目標値(%)	E 評価結果			
								10月		2月	
								達成値	評価	達成値	評価
a 営構生「築まされるべき生きた言葉」を経営が	り熟し学て習い集団として学級づく成	<ul style="list-style-type: none"> 「はちの子の心得」を軸に学級会での話し合い活動を深化させていく。 「じまんの俳句」を軸に暮らしの事実を価値付けようとする意識を高めていきながら、児童相互に作品を評価し合うことで互いの良さを認め合う関係づくりを構築していく。 	4段階	児童も教師も意思を持ち、「生きた言葉」を交流しながら問い直すことで新たな山場が創られていく学級。	○	<ul style="list-style-type: none"> 「学校楽しい」と学級集団における適応感 「はちの子の心得」振り返りの記述が学年の目指す姿を現している 	80%	87.2%	A	88%	A
			3段階	児童が事実を目を向けながら「生きた言葉」を生み出し、教師はその熱を感じ取って価値付けを重ねている学級。			80%	87.7%	A	95%	
			2段階	「生きた言葉」で語ろうとしている児童を教師が大切にしている学級。							
			1段階	教師が発言や評言を促している学級。							
b 研意「究問推し進直授業」をサイ構築するを	室文教化師のづくり目を磨き合う職員	<ul style="list-style-type: none"> 協働的な学びと個別最適な学びの一体化をめざした授業研究 教員の主体性に委ねたSD研修 教員の得意を生かす教科担任制の充実 	4段階	児童が学び方を調整・選択しながら自分のタイミングで問い直しを重ね、次の学習や生活に生かしていく授業(自ら学びを創っている授業)	○	<ul style="list-style-type: none"> 他者とともに学び合う楽しさを味わう教師の割合 学力調査の全国平均以上の児童 「学校楽しい」と学習意欲 	90%	100%	A	100%	A
			3段階	学びのねらいに沿って児童が自分の思いや考えを自由に表現し高まり合う授業(教師が児童に学びを託す授業)			80%	-%		国算理81.0 80.6 89.4	B
			2段階	児童の意欲を喚起する教材で授業に驚きをもたせ、児童相互が問いを深めている授業(教師の思いがある授業)			80%	83.3%	A	84%	A
			1段階	教師の発問によって児童が答えを探し出している授業(教科書に沿った授業)							
c 自ら行事認識の創問直	伸れた前学年行事性を引き継ぐ現学年継が	<ul style="list-style-type: none"> リーダー育成とともに人と関わる喜びを経験する縦割り活動(異年齢交流) 中学校の自治活動を見据えた児童会行事 取り組み方を児童に委ねた学校行事 	4段階	各種活動や行事を自らの殻をやぶり自らを成長させていく山場ととらえ、次の活動に生かしている。	○	<ul style="list-style-type: none"> 「学校楽しい」と自己肯定感 「はちの子の心得」振り返りの記述が自己の目指す姿を現わしている。 	80%	78.1%	A	79%	A
			3段階	自分の強みや弱みを認識し、自ら選択した役割をやり遂げている。			80%	94%	A	98%	A
			2段階	各種活動や行事に、相手の気持ちや立場を理解し協力して参加している。							
			1段階	各種活動や行事にまじめに参加している。							
d 実児童や大人の集いが充	活コ動のユニティ・スクール	<ul style="list-style-type: none"> 地域とともにある教育活動を全学年設定(カリキュラム・マネジメント) 保護者と教師が共に学び合う機会の創造 コミュニティ・スクールを核とした地域行事の創造 	4段階	大人も児童も地域の一員として、地域に愛着や誇りをもつ状態。	○	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動の満足度(保護者アンケート) 大人が集う活動の満足度(地域アンケート) 	85%	93.2%	A	91%	A
			3段階	大人も児童も地域の一員として学校行事や地域行事を通して関わり合い、学び合う状態。			70%	89%	A	94%	
			2段階	保護者や地域が「自分に何かできることはないか」と当事者意識をもち、活動に参加している状態。							
			1段階	保護者や地域が各種たより等を見てサポーター活動に参加し、学校の様子を知っている状態。							



F 結果の分析・解釈・変容（中間 10月）

<p>a</p> <p>○「はちの子の心得」を軸に学級会で自分たちの目指す姿や振り返りを話し合う活動が定着した。</p> <p>4・5・6年生では、自分たちのくらしの事実を目に向け、今後どんな姿を目指したいのかを個や学級・学年で表現させ、教師が価値づける場面を意図的に仕組むことができるようになってきている。</p> <p>○学級集団への適応感の向上は、以下のような取組や結果の成果だととらえている。</p> <p>① 学級活動と道徳を組み合わせ、自分の思いを表現したり、友達の思いを受け止めたりする活動を学期初めに行う。道徳参観日の中で、保護者とも共有する。</p> <p>② 代表委員会でバスケットゴールの使い方のルールを事実と願いを基に変えていく。</p> <p>③ 保健室利用者数の変容</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th>倦怠感</th> <th>情緒不安</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>R5.9月</td> <td>24人</td> <td>30人</td> <td>54人</td> </tr> <tr> <td>R6.9月</td> <td>9人</td> <td>17人</td> <td>26人</td> </tr> </tbody> </table> <p>④ 1年生スタートカリキュラムを4月に続き、9月も実施。自分で選んだ遊びで1日をスタートさせる。その遊びの中に2学期の学習材を上手く織り込む。</p> <p>●学級集団における適応感については、学級差（肯定的評価73%—99%）や個人差に目を向け、教師が目指す姿に当てはめようとするのではなく、個の伸びを語れるように見とる目を磨き続けたい。</p> <p>○俳句タイム</p> <p>「じまんの俳句」では、年度当初に教師用の「ミニ俳句講座」を開き、俳句作りの指導について学ぶことができた。児童にも同様の講座を開き、俳句作りのポイントや意欲を喚起させることができた。また、俳句を作るだけで留まらず、友達的一句から情景を思い浮かべたり、自分なら○○すると考えたりすることができた。今年度は、俳句タイムを設けた（5月運動会予備日・6月毎週月曜日・7月俳句週間・9月俳句週間）。俳句タイムがあることで、普段俳句作りに取り組みにくい児童も意欲的に取り組むことができた。写真で一言も在籍学級の写真を活用することで、自分事として取り組むことができた。7月と9月には、句会を設け、児童同士で相互評価させることで、俳句作りの意識が高まり、俳句の言葉の見方や考え方を広げることができた。</p>		倦怠感	情緒不安	計	R5.9月	24人	30人	54人	R6.9月	9人	17人	26人	<p>b</p> <p>○教師同士が学び合う職員室文化をつくるために、今年度は研究に関わる「研究通信」を週に1・2回発行してきた。公開授業や部会の研修、SD研修のみで自己研鑽を済ませるのではなく、授業提案者が授業のねらいや意図、目指したい児童の姿を「生きた言葉」で語るすることができた。若手の教員がミドルやベテランの教室や学習・生徒指導の方法を参考にし、自分なりに実践する様子も見られた。</p> <p>○昨年度から全校で学期に1回程度自由進度学習（本校ではマイプラン学習と呼んでいる）を実施してきた。マイプラン学習の手法については、指導者・児童も慣れてきたが、マイプラン学習を通してどんな姿を目指すのか、何をねらうのか、どのように見取るのが課題であった。今年度は、昨年度に引き続き、抽出児童を数人選び、その児童に合った支援・指導をするためにはどうすべきかを協議・研修を重ねてきた。</p> <p>今年度は、教師の「見取る力」を高めるために、公開授業の前には、児童のどんな姿を見取るのか、価値付けていくのかを共有し、そのためにはどんな手立てが必要なのかを協議することができた。</p> <p>○マイプラン学習の学びを生かし、一斉学習の中でも、自己決定・自己選択する場面につなげる授業づくりができるようになってきた。</p> <p>○●「見取る力」については、教師の間でも意識が芽生え、価値付ける場面も多く見られるようになった。しかし、「マイプラン学習」においては、座席表を活用し、「見取る」ことを大切にしている教師は増えてきたが、一斉授業でも個別最適で協働的な学びの一体化を図るためにも普段から「見取る力」を高めていかなければならない。</p> <p>○●部会の横のつながりを意識して、指導案には「学校楽しいーと」の指標を取り入れ、授業前と授業後で児童にどのような変容が見られるか客観的なデータを得られることができた。公開授業を行った全学級が行っているわけではないため、学力の伸びだけでなく非認知能力の部分も高められたのかを検証していく必要がある。</p> <p>●特別支援の視点を用いた個別最適な学びの専門性を高めていく必要がある。</p> <p>○夏季休業中の研修では、上記の課題も踏まえ、児童が自分自身で学びを進められるように、抽出児童を想定した支援グッズを各学年が作成し、交流することができた。各学年で交流することで、他学年でも授業の中で取り入れることができ、縦のつながりを意識した指導にもつながった。</p> <p>○SD研修では、SD研修推進リーダーが中心となり、特に若手教員の指導力の向上を目指して実施することができた。教員に取ったアンケートでも、満足度は77%で、「教育書には載っていない専門的な知識や技能を知ることができ、普段の生活に生かすことができた。」という意見も見られた。また、研究部だけでなく、ベテランやミドルの教員にも協力を仰ぎ、ベテランやミドルから若手教員へ指導技術のバトンを渡すことができた。</p>	<p>c</p> <p>○「学校楽しいーと」の自己肯定感の4項目の中で、「ほかの人から好かれている方だと思う」の項目のみ数値が低い。「ほかの人から好かれる」という感覚が、自己肯定感と合っているのかを考える必要がある。</p> <p>○「学校楽しいーと」の自己肯定感の全項目において、低学年の数値が高くなっている。高学年になるにつれ、周囲との関わりの中でメタ認知できるようになるからではないかと考えられる。自分自身を見つめる力が付くことにより、自己肯定感をもちにくい状況があるといえる。しかし、それが一概に良くないこととは言えない。万能感から、自分の良さに気付き、自分を肯定する力を付けさせていきたい。</p> <p>○昨年度の自己肯定感の全項目の数値は77.5→77.3→77.0と徐々に下がっていったのに対し、今年度は77.1→78.1と上がっている。今年度の取組として、全ての活動において児童が主体的に関わっていくことができるように、取組を児童に委ねていくようにしたり、話し合い活動を充実させ、児童自身が合意形成をしながら自分達の暮らしを創っていきけるようにしたりした。また、縦割り活動での学年のめあてを立てたことで、教室でも班活動のなかでも先生方が声かけをし、毎日の縦割り掃除や縦割り遊びで自分のめざす姿を意識することができた。1年生はスタートカリキュラムに取り組み、夏休み明けにも楽しみをもって学校に来ることができた。SSTと道徳科授業を組み合わせた道徳教育プログラムに取り組み、温かい道徳的雰囲気の中で思いやりや共感を育成していった。1学期に行った運動会では、実行委員を中心とし、児童主体の活動になるように取組を行った。全校児童が集まり、高学年の姿を見て、自分達もそんな高学年になりたいという思いをもつ児童もいた。また、希望者を中心にラジオ体操にも全校児童で取り組んだ。希望した6年生や体育委員をリーダーとして、休憩時間等も練習を行った。また、地域の方に指導していただくことで、学校と地域が連携を取りながら進めることができた。これらの様々な取組が合わさり、自己肯定感の全体の数値が上がることにつながったのではないかと考える。</p> <p>●自己肯定感を高める取組を進めるためにも、自己肯定感の捉え方を問い直す必要がある。基本的自尊感情を高めることを意識した教師の評価が必要である。</p> <p>●特性のある児童がいる中で、多様性の中で子どもを育てる視点をもって教育活動を進めていかなければならない。子どもに主体性をもたせていくためにも、失敗を許容する風土を育てていきたい。</p>	<p>d</p> <p>○地域と教育課程のカリマネを行うことで1年間の見通しをもった計画ができ、各学年サポーターの募集がスムーズにできた。これまで、CS発信が多かったが各学年からの連携・協力要請があり、双方向性のある教育活動ができつつある。特に4年生の総合的な学習の時間「1000人プロジェクト」では、中央小の歴史を知っている地域の人々やSweetやベルママなどの団体と交流が深まっている。</p> <p>○企業からの申し出もあり、ベルマーク委員会の活動に工夫が見られ、主体的に異学年児童が集まったり、調整したりするなど社会参画への意識が高まった。</p> <p>○夏休みの活動として、夏休み塾では、親子枠を新たに設け、107名（内サポーター37名）の参加があり、緑ヶ丘中学校、安芸府中高等学校、大学生などの協力を得ることができた。夏祭りでは、地域の盆踊りを掘り起こし、盆踊り練習には77名の参加があり、低学年を中心に地域の踊りに込められた願いや感謝の気持ちに触れることができた。当日は、町内会、教職員、南小CS、緑中CS、盆踊り保存会、安芸府中太鼓 かつぼ連ひびき会等の各種団体が運営に携わり、中央小CSを核とした地域行事の活性化を図ることができた。多くの児童も参加し、地域の行事を楽しむ姿が見られた。</p> <p>○PTAやCSが校内研修に参加するようになり、教師とは違った視点でのアプローチがあり、研修内容や研究内容の質的向上を図ることができている。</p> <p>○学校で、毎月のびいカフェ相談会を開催したり、各学年の懇談会にチームくすのきによる『親の力』をまなびあう学習プログラム講座を開催したりすることで保護者の悩みや困りごとを相談できる場の工夫と家庭教育応援が充実しつつある。</p>
	倦怠感	情緒不安	計												
R5.9月	24人	30人	54人												
R6.9月	9人	17人	26人												



G 改善方策案

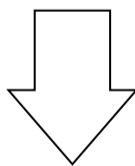
a	b	c	d
<p>○後期は、進級・進学に向けてどんな姿を目指すのかを問い直していく。個人・学級・学年の事実（良い点・反省点）を学校行事や各取組と結び付け、話し合いを重ねる。</p> <p>○教師として個や学級の伸びを語れるよう「伸び」を見とる目を磨き続けるため、学年会や分掌部で「語る」ことを意識する。</p> <p>○学級代表の句を選ぶ活動を通して、今年度学級会で取り組んでいる合意形成を図る基礎につなげることができた。お互いの良さを認め合う、自己肯定感を高めることにつなげられるように句会の形だけで終わらないように価値付けていく。</p> <p>○自由投句以外の俳句作りにおいても、指導資料を準備したり優れた作品を紹介したりして、学級担任の指導の一助となるようにする。</p>	<p>○公開授業の前には、授業の中で「児童にどんな力をつけたいのか」、「どんな姿が見られればよいのか」を共有したうえで、授業を参観する。参観者の授業を見る目を高め、教師が適切に価値付けているかを協議できるようにする。さらには、環境の整備にも目を向け、児童の姿からどんな手立てが必要であったかも協議できるようにしていく。</p> <p>○今後の全体研修（1年・2年・6年）においても、個別最適な学びをすすめるため、特別支援学級担任や特別支援COに事前に児童の見取りや支援の在り方について相談し、授業を創っていく。</p> <p>○夏季休業中に実施した研修が、研修のまま終わらないように、抽出児童を想定した支援グッズにより、児童にどのような変容が見られたのか語れるように見取っていく。年度末の研修において、各学年から本年度の実践の交流を行い、次年度にもつなげていく。</p> <p>○SD研修では、上半期に取ったアンケートを基に、教員の必要感に応じた研修を仕組んでいく。また、研究に関わる研修も研究部だけでなく、ベテラン・ミドルの教員と協力して進めていけるように計画を立て実施する。</p> <p>○SD研修だからこそ出来る、自由度の高い内容も取り入れ、日頃学べない、教科外のことについても研修を行い、充実度・満足度を高める。また、満足感を高めることだけでなく、教師の仕事の魅力も伝えていきたい。</p>	<p>○価値づけの方法を、他者との比較ではなく、個々の良さに目を向け、基本的自尊感情の向上を意識した視点で行っていく。</p> <p>○行事のねらいを明確にし、めあてと個々の特性も含めた児童の姿で問い直しをしていく。</p> <p>○個々の児童に応じ、個別最適な学びとなるように、支援の方法を一律にせず、ゴールの姿も幅をもたせていく教師の目が必要だと考える。</p> <p>○主体性をもった行事等の運営にしていくためにも、リーダーとなる児童の考えを支えながら、挑戦と失敗を許容した取組を行っていききたい。</p> <p>○SSTと道徳科授業を組み合わせた道徳教育プログラムに取り組み、温かい道徳的雰囲気醸成していくとともに、道徳科を日常に生かしていく。</p>	<p>○高学年を中心に地域行事へのボランティア活動参加が見られるようになったので今後は、下級生や次に繋げる意識付けをしながら活動を促していく。</p> <p>○PTAとCSが協働する際には、PTAの意識がCSのお手伝いとどまらないよう学校がリーダーシップを発揮する。</p> <p>○地域ぐるみの防災教育について検討していく。</p> <p>○日頃の活動以外でも各団体のリーダー交流会を開催するなど顔の見える関係を築き、信頼関係を構築する。</p>

学校の大きな方向性に照らして（問い直し）

本年度の大きな方向性として最も重要なことは、「日々の暮らしの中に起こる様々な学級の問題に、児童一人一人が自分事として関わり、自分たちの問題として捉え、自分たちで解決の道筋を見出し、自分たちでよりよい暮らしを創っていくという学級づくり・学年づくり」という課題の問い直しを通して、「子どもは発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払うべき存在である」という本校の子ども観（本校は子どもをどのような存在として見るのか）を明確にしたことである。

学校の課題に取り組む中で、若手教師に対してベテラン教師が寄り添い、ともに課題解決に向かい、一人一人が学校の課題を自分事として捉えることのできる教職員集団に育ってきている。そうした教職員集団に支えられて、教師は児童に眼差しを向け、日常的に肯定的な言葉がけを行うことよって、自らの成長に気付くことのできる児童が増えてきた。また、自分の「生きた言葉」で語る高学年児童に低学年児童が憧れ、それを手本とする学校の文化が育ってきている。しかし、同時に、子ども観を明確にしたことによって、「教師が目指す姿を児童にあてはめようとしているのではないか」という課題も見えてきた。この課題は、本校が求める「(教育活動の中に)一人一人の子どもに発達の可能性を見出しながら、学級・学年・学校での関わり合いの中で、自らの根っこを太らせていく教育」をねらっていくための本質的な問題であり、これが見えてきたことが、最も重要な学校経営上の成果である。

今年度後半は、日々の教育活動を通して、「教師が目指す姿を児童にあてはめようとしているのではないか」を問い直して、来年度の課題生成につなげていく。



a
○「はちの子の心得」が学級・学年で目指す姿を問い直す場として根付いている。振り返るための具体的な言葉や行動、そしてそれらがつながって積み上げられていると児童が実感できる工夫が増えている。



○学級集団への適応感維持は、以下のような取組の成果だととらえている。

① 4年生を中心に取組んだ道徳教育プログラムや1年生のスタートカリキュラムによる体と心を温めながら学びにつなげる取組。

② 縦割り活動や来年度の執行部選挙など、4・5年生の意欲向上と6年生の先輩としての自覚を促す活動の継続。

③ 保健室利用状況の変容

・1月末までの保健室利用者
R5年度 3,931人
R6年度 2,961人
→970人減少

・学年別利用者割合

	1年生	4年生
R6.1月	25%	24%
R7.1月	16%	11%

1・4年生の取組が功を奏している。

④ 多面的児童理解と情報共有

・教科担任制児童アンケート
「困ったことを相談できる先生が増えた」肯定的評価
広島県 78.0%
本校 81.5%

○俳句タイム

「じまんの俳句」は、本校の文化として定着し、児童が自分の体験から生まれる「生きた言葉」で表現する作品が多く生まれた。

俳句週間では、句会を設け、児童同士で相互評価させることで、俳句作りの意識が高まり、俳句の言葉の見方や考え方を広げることができた。

俳句タイムの取組により、多数の投句が見られた。一方で、質よりも量にこだわってしまう部分もあるため、投句の仕方について検討が必要である。

b
○教師同士が学び合う職員室文化をつくるために、教師同士が協働して学ぶことができた。

① 4月当初、理科での授業開きを公開し、学習規律・授業はみんなで作るという意識の醸成を投げかけることができた。② 各学期に1回、各学年でマイプラン学習に取り組み、個別の手立てを具体的にいった。③ 公開授業の前には、授業の中で「児童にどんな力をつけたいのか」、「どんな姿が見られたらよいのか」を共有し、指導者も参観者も見取る視点を明確にした上で、協議を行うことができた。④ 教科担任制による教材研究の深化。⑤ 夏季研修で行った特別支援教育の視点をういた教具を基に、児童の姿を見取ることができた。○SD研修では、教員の必要感に応じた研修を仕組むことができた。また、ベテランやミドルの教員と協力して進めることができた。

○教師が少しずつ児童に学びを委ねることができるようになり、自己選択・自己決定する場を仕組むことができるようになった。

○一斉授業でもマイプラン学習でも個別最適な学びがあり、緩やかな協働があることに気づき、そういった児童の姿を見取る「教師の目」が育ってきた。

○●学力調査において達成率は以下の通りであった。

%	国語	算数	理科
1年	75.7	92.2	—
2年	87.4	92.7	—
3年	86.3	93.3	85.3
4年	84.3	71.7	97.9
5年	79.2	70.6	91.6
6年	73.0	63.0	83.0
全体	81.0	80.6	89.4

c
○●常時活動として行っている縦割り掃除では、6年生だけでなく、2～5年生も下学年を意識して取り組んでいた。掃除の振り返りで、自分の学年の目標を達成しているという児童が多いが、メンバー表やファイル等に各学年のめあてを載せ、自分の学年のめあてを毎日確認できるようにすると、より意識できて効果的だと思われた。6年生は、リーダーとしての自覚をもち、主体的に動いていたが、リーダーとして、自分が正確に理解していないと教えられないという思いをもっていることから、特に掃除場所を変更するタイミングでは、教職員のフォローが必要だと思われた。自己肯定感の数値は、1～5年は現状維持または上昇し、6年生は低下した。

○学習発表会に向けて、学年のめあてだけでなく、自分のめざす姿を意識して取り組み、問い直しながら、行事をつくることができた。大勢の前で言葉を言ったり、歌を歌ったりしたことで自信がついたという児童や達成感を味わったという児童がたくさんいた。個別指導教室の児童も学習発表会をきっかけにして前進できている。

○はちの子祭りにおいて、低学年は教師の力を借りて、中高学年は行事の全てを児童が主体となって話し合い、決定しながら進めていき、当日の祭りで実現させていくことができた。企画・準備・運営・片付けまで、全てを児童の手に委ねることで、休憩時間に集まって準備をしていたり、日頃はおとなしい児童がお祭り当日、一生懸命声を出して説明をしていたりする姿が見られた。

○どの学年も学年集会や学級会、日々の学習の中で、話し合い活動を充実させ、自分の考えを相手に伝えるように話したり、友達の考えを聞いて受け止めたりし、多数決ではなく合意形成をしながら進めている。また、SSTと道徳科授業を組み合わせた道徳教育プログラムに取り組み、温かい道徳的雰囲気の中で、他者への思いやりや共感を育成するように取り組んでいる。

○「嫌な思い」をしている児童を察知した際は、臨時いじめ防止委員会を開いて対策を話し合い、組織的対応を重ねた。学年で生じた問題を自分事として関わる児童を育てるために、学年総会を開き、自分たちの姿について考えさせ、日常のふるまいや友達への言葉遣い等を自分たちで振り返ることができるようになりつつある。

○児童は、日常生活やクラブ活動等、様々な場面で保護者や地域の方に支えられていることから、困ったときに相談できる大人が増えている。お世話になっているたくさんの方々に「感謝の会」で感謝の気持ちを伝えようと主体的に会を工夫しようとする姿が見られる。

d
○サポート体制の強化と課題の整理

- ・各学年から安心・安全サポートの依頼があり、ニーズに合った支援の提供について学校とCSとでより綿密な意見を交わすことができるようになった。
- ・既存のサポート体制を見直し、学校行事のサポート、地域のサポート、その他の活動等に分類し、より効果的な支援を検討することができている。
- ・その過程の中で新たな課題、リソース不足の課題が明確になり、持続可能な活動にするための次へのステップに繋がっている。

○総合的な学習を通じた地域連携の深化

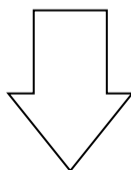
- ・4年生の総合的な学習の時間を起点に各種団体との交流の促進ができている。
- ・地域の資源を活用しながら、入学説明会では、学校、PTA、ベルママ、Sweetとともに主体的に説明会を開催することができた。新1年生の保護者が安心して入学式を迎えることができる仕組みとなればより幸いである。
- ・教師だけではなく地域住民が教育に関わる機会を増やすことで学校と地域が一体となった学びの場が生まれてきている。(わくわく1000人プロジェクト・ハッピーハチハチハーモニー・防災教育・志教育)

○子どもへの成長と地域社会への影響

- ・地域の大人との交流を通じて、児童の協調性や感謝の気持ちを育むなど情緒的な成長に繋がっている。
- ・子ども達にとって、多様な学びの機会が増え社会との繋がりを意識するきっかけにもなり、人と繋がるよさや人に支えられていると実感する児童が増えてきている。(児童の俳句や作文・はちの子ひと図鑑・高校生のプレゼン)
- ・学校・家庭・地域が協力することで持続可能な学びの環境が整いつつあることが児童も大人も自ら伸びる意思の形成に繋がっているのではないかと考える。

○保護者と教師がともに学び合う機会の創造

- ・参観日や学級懇談会、親プロなど参加者同士の対話を通じて保護者も学び続ける文化を創ろうとする意識が高まったが、対話を通じて相互理解を深めるとともに、子どもを育てるパートナーとして学び合う関係になるまでには至っていない。



I 改善方策案

<p>a</p> <p>○「はちの子の心得」を継続する。自らの姿を振り返るために1～3年生は「自分からあいさつをする」「くつをそろえる」など、できたかどうかははっきりとした取組をめざす。高学年は、行事の振り返りに終わらず、年度当初の自分と比べながら、自己認識力を高めるよう促す。</p> <p>○来年度も道徳と学活をリンクさせ、学級を温めながら1・2学期をスタートする。</p> <p>○学級への適応感を高める取組について学級・学年でカリマネも含め、常に問い直す。</p> <p>○「じまんの俳句」の取組は本校の文化として継続する。学年の実態に応じた指導、教師が機を逃さずに俳句を書けるようにアンテナを張っておくことが必要である。</p>	<p>b</p> <p>○児童に付けるべき力を明確にし、本校の子ども観に沿って、児童の学びの姿を見取り価値付けていけるようにする。そうすることで、自ら伸びる児童に向けて必要な手立てを考えることができ、自ずと教師が児童に学びを託すことができるようになると思われる。</p> <p>○安心した学級づくりが授業づくりにつながることを教師が意識し、学級経営を行っていく。</p> <p>○特別支援の専門性を高めるために、研修を重ね、一人一人の伸びが見えるような手立てを探っていく。</p> <p>○児童に身に付けさせたい力とは何かを考え、授業の質の向上とともに「家庭学習のすすめ」を活用し、主体的な学び手を育てていく。</p>	<p>c</p> <p>○自分達でよりよい暮らしを創っていくために、今後も合意形成していく話し合い活動や、児童が主体となる場（取組を児童に委ねる場）を増やしていく。</p> <p>○どの活動でも、活動のねらい、自分のめざす姿を明確にし、視覚的にいつも立ち返ることができるようにしておき、取り組みながら、自分の姿を問い直していくことができるようにする。</p> <p>○発達支持的生徒指導を進め、児童が自発的・主体的に成長・発達できるよう、望ましい行動に着目し、児童を認める声かけ等をしていく。</p> <p>○SST と道徳科授業を組み合わせた道徳教育プログラムに取り組み、温かい道徳的雰囲気の中で、他者への思いやりや共感を育成していく。</p>	<p>d</p> <p>○繋がりを深める仕組みのステップアップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者と教師がともに学び合うことは、子ども達の成長を支えるためのステップなので、ワークショップや授業参加型参観日、保護者・教師合同の研修会など子育てや教育について対話を重視した学びの場を増やす。保護者と教師がフラットな関係で意見交換できる場や事例を共有しながら実践に繋がる場を工夫していく。 ○PTA 活動を義務感ではなく、「親同士の学びの場」座談会や講師を招いての研修会等工夫する。 ○地域の大人が学校行事や授業に関わることで、児童が地域の活動に参加することなど定着しつつあるので、このまま相互に支え合う関係を継続する。 ○ともに創る文化を育む <ul style="list-style-type: none"> ・保護者、教師、地域が児童のためにしたいことを出し合って、ともに企画する。 ・地域の活動と学校教育を結び付けるカリキュラム（各学年を見通し、貫きのあるカリキュラム・各教科と繋げた企業連携カリキュラム）を作成するなどして、実社会との繋がりをもちながら学ぶ機会を得る。 ・幼保・小・中連携を通じた社会に開かれた教育課程の創造をしていく。
--	--	--	--

学校の大きな方向性に照らして：(問い直し)

本年度は、「子どもは発達の当事者であり、未来の大人として敬意を払うべき存在である」という本校の子ども観を明確にし、教師自身の子どもに向ける目線を問い直しながら、教育活動を推進してきた。その中で、「教師が目指す姿を子どもに当てはめようとしているのではないか」という課題も見えてきた。この課題に向き合いながら見出した考えや気づきを分掌主任等が中心となって洗い出した内容は次のとおりである。

○長いスパンで子どもの変容を見ること。いろいろな教職員の見取りを自分の見取りと照らして考える必要があること。めあてや目標がどれだけ子どもに合っているかと熟考する点で、自分にとって学びとなった。

○子ども自身が目指そうとする姿は1人1人違う。教師側が目指す姿に当てはめようとしてしまい、教師の意に添うようにさせようとしてしまうあやうさに気付いた。スモールステップで「できる！」を実感させ、その積み重ねが小さな自信を生み、次へのチャレンジにつながるよう、その子の歩調を見取り、すぐに目に見えるような成果を望まず、待つ姿勢を大切にする。

○価値や理想を押し付けるのではなく、1人1人の特性や個性を理解し、尊重し、じっと待ち、成長を見守ることが大切。1人1人の子どもの言葉や行動を丁寧に受けとめ、それぞれの発達段階に合わせた関わり方を意識し、安心して挑戦できる環境や自分で考え判断できる機会を増やしていく等、適切な環境を整え工夫する力が必要である。

○アンテナを敏感にして、つぶやきを見逃さないようにする。子ども本人の思いが実現できるよう選択肢を考え出し、これならできそうという方法を本人が決められるようにする。チャレンジできるよう支え、子どもが主役で自ら高めていく力をつけていくことが大切。

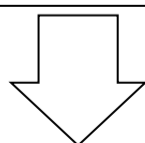
○教師が引き上げたい姿と子どもが学ぼうとする意欲が合致しないと、よりよい方向には伸びない。教師が引き上げたいところまで子どもの意欲が高まるかどうか、そのせめぎ合いや試行錯誤の繰り返しで日々の取組を進めていく。

○子どもは安心できる居場所があり、発達段階に合った学習内容があれば自ら伸びる力をもつと思う。教師はあくまで伴走者として、自分の価値観にはめ過ぎないようにする必要がある。そのためにも「問うこと」を大切にしたい。

○子どもは自ら伸びる種をたくさんもっている。たくさんの可能性の種をもつ子どもたちの前で、何かしら芽を引き出し、伸びる手助けのできる教師でありたい。

【次年度の方向性】

- ・教師側から見ためざす姿ではなく、児童自身がめざす姿（どのような姿になりたいのか、そのためにはどのように行動すべきなのか）の実現に向けて、教師が児童に寄り添うとともに、児童自身に学習や活動を委ね、主体的に学んだり、自ら企画・準備・運営したりしていけるよう、児童が主役として自ら伸びていける場を設定する。その際、個の発達段階に応じて、教師がスモールステップで支援していくとともに、待つ姿勢を大切にしながら、児童の成長を見取り、肯定的な言葉かけを行い、自己を受容し自己肯定感を高めていく。
- ・日々の授業や標準学力調査の結果を踏まえて、児童の表現力を高める必要がある。個別最適な学びと協働的な学びの一体化の充実とともに、児童が必要感をもって表現したり、相手の意図を汲み取ったりする等、対話的で深い学びを仕組んでいく。
- ・学校がどんな子どもたちを育てていきたいのか、何に取り組もうとしているのかを保護者や地域に理解してもらい、学校だけでなく地域も含めて子供が育つ土壌だと捉え、保護者や地域を巻き込みながら、「学校を核として地域と一緒に子供を育てる」という意識をもち、教育活動を行っていく。そのために、PTA と CS が協働して保護者が学ぶ場を増やし、教師と保護者と地域が意見交流しながら、学校の取組や願いを発信していく。



学校関係者評価を受けての改善方策（修正）

自己評価表を現在の形式にして3年。今年度の学校自己評価に対して、学校関係者評価では、全体を通して概ね「適切である」との評価であった。学校関係者評価を受けて見直した点は2つ。

（1）次年度の足場となる課題

今年度は、これまで暗黙であった経営理念「学校は子どもが育つ土壌である」を追求していく学校としての「子ども観」を明確にしてスタートしたが、中間評価の時点で、「教師がめざす姿を児童に当てはめようとしているのではないか」ということが、本校の求める「（教育活動の中に）一人一人の子どもに発達の可能性を見出しながら、学級・学年・学校での関わり合いの中で、自らの根っこを太らせていく教育」をねらっていくための本質的な課題として見えてきた。それゆえ、後半は、この課題をより意識しながら、日常の教育活動を行った。

その結果、「教師が目指す姿を児童に当てはめようとしている」という課題が克服されたとはいえない状態ではあるが、学校関係者評価では、教師自身の子どもや環境への目の向け方、捉え方、考え方が少しずつ変容し始めたとの評価をいただいた。こうした変容は、分掌主任等が中心となって課題に向き合いながら見出した考えや気付き（上記）に見える教職員の子どもを見る“まなざし”にみることができ、本校のビジョンである「教師こそ最大の教育環境」に深く関わる教職員集団の学習の成果であると考えます。

このことから、次年度は、このビジョンに照らして、教師が子どもの姿から謙虚に学び、子どもの育ちを喜び合う暮らしを創りながら、教師の有りようを問い直していくことで、より深く、経営理念「学校は子どもが育つ土壌である」を追求していきたい。

（2）課題を追求していくための自己評価のあり方

本校の自己評価のあり方については、柱の考え等は学校の成熟が期待できる設定であったとしながらも、成熟度への言及を丁寧にするべきとの意見をいただいた。単に計画し想定した状態を達成するというのではなく、その価値とすべきところを問い直すことが「土壌（学校）を耕す」ためには重要であると考えます。

このことから、次の学校経営計画策定にあたっては、（1）を踏まえつつ、「学校は子どもが育つ土壌である」を追求し得る自己評価をめざして、特に、次のように考察することを大切にしていく。

柱aでいえば、本校が長年取り組んでいる「じまんの俳句」については、「じまんの俳句をどうするか」と単に活動を着実に実行するためではなく、柱aのねらいである「学習集団として成熟していく学級づくり」に、「じまんの俳句」という中核の活動がどのような意味や意義を持ち得ているのか、たとえば「俳句で学級がどのように成熟してきたか」を考察する、といった方向性である。